

# 1960年代～現代の映画にみる

## 妻の「美しい」日本語

小林 美恵子

### 1. はじめに

遠藤（2010）では、1940年代後半から60年代初頭までの映画10本の台詞を掲げ、このうち50年代までの9本について「父親・夫は敬語を使わず、娘・妻は敬語を使うのが基本になっている」とした。また、戸張（2010）による80年代以後の6本の映画の調査からは、83年の作品で用いられていた妻から夫への丁寧体が90年代や2000年以後の映画には現れないこと、いずれの映画でも娘から父母への敬語は見られないことなどが読み取れるが、この変化の過程についての分析・言及は行われていない。また、殊に60年代以後については取り上げた映画の数も少なく、論考の根拠にいささか物足りない点があるのは否めない。

女性を使うべきとされた「美しい」日本語といえば、いわゆる敬語とともに「のよ」「だわ」「かしら」など女性専用とされた文末形式も挙げられるだろう。敬語使用の変化とともに、この50年女性のことば遣いが中性的になってきたというのもよく言われることである。

小論では、遠藤・戸張の2論文を補う形で、戦後映画史の中で、女性の用いる敬語と文末形式がどのように台詞に現れているかを、紙数の都合もあり、おもに妻から夫へのことばに絞って観察する。「戦後1947年に新憲法が実施されて、家父長制は廃止されたが、言語生活では、家父長制がそのまま残っていた」（遠藤2010：113）表れとして、父や夫に「美しい」日本語（敬語）を使うことが女性にいわば強いられた時代から、「家族間の会話において敬語がほとんど使われていない」（戸張2010：126）という現代への変化の様相をあきらかにし、変化の原因をも探してみたい。

遠藤（2010：097）も述べるとおり、映画は作為的に作られたもので、

事実ではないが、制作者たちが真実を映し出そうとして構築した虚構であり、虚構の中にある真実を窺い取ることはできる。制作者により真実として選び取られた言語として、小論でもいわば役割語としてではあるが、各時代の映画の台詞を調査対象とするのである。

用例を採集したのは1960年～2010年に公開された35本の映画に登場する45組の夫婦の会話である。内容的には、原則的に都市やその近郊における家族や夫婦が登場する現代劇（公開時点での現代を描いたとされるもの）とし、方言によるドラマや、時代劇、また現代を含むが長期にわたる期間を描いた作品などは対象としなかった。公開年については、できる限りこの期間のすべての年代にわたるようにと考えたが、実際には入手しやすい作品には年代的な偏りもあるので、10年ごとの区切りの中で前半後半の作品を入れるよう配慮するにとどまった。その他の条件による恣意的な作品の取捨はしていない。映画作品についてはすべてDVDを参照した。公開順の一覧表を論文末に掲げる。なお、これらのうち2作品『家族ゲーム』『わたしのグランパ』は戸張（2010）でも調査対象としたものであるが、前述の条件により対象とすることとした。

用例については、それぞれの夫婦ごとに通し番号を振り、同じ夫婦の違う場面での会話については場面①、②のように区分した。夫婦の年齢や職業等については、映画内に情報が示される場合はそれに従い、示されない場合は子どもの年代、画面に示される生活や職業の描写、あるいは演じる俳優の年齢などによって判断し年代・職業表示の後に「？」をつけて推測であることを示した。職業については不明な場合は示していない。

敬語に関しては遠藤・戸張（2010）にならい、「おっしゃる」「ご用」など語彙的なものを「敬語」、「お泊りになる」のような動詞の尊敬の形式を「尊敬語形」、「お返すする」のような謙譲の形式を「謙譲語形」、両者を一括する場合「敬語形」、「です」「ます」を伴う文末を「丁寧形」、常体の文末を「非丁寧形」として分析する。また旧来女性がおもに使うとされた文末形式（終助詞など）を「女性（文末）形式」、女性が使うことは比較的少ないとされた形式を「中性（文末）形式」とし、この判定については小

林 (2009) の分類にしたがった。これによれば、台詞によく現れる「なのよ」「だわ」「わね」「のよ」「かしら」などは女性文末形式、「だよ」「だ」「動詞・形容詞の言い切り」「かな」「じゃない↑」などは中性文末形式ということになる。

なお、文字化に際してつけた↑は上昇調の文末を示し、妻の発話の「敬語」「丁寧形」「女性文末形式」「中性文末形式」などの該当箇所にはそれぞれ表記のような下線をつけた。

## 2. 妻から夫への敬語と文末形式

### 2.1 『お早う』・・・50年代末の夫婦の会話

まず、1950年代末の妻たちの会話の様相を見ておく。

小津安二郎の映画『お早う』(1959) は都市近郊の団地 (戸建ての賃貸住宅) に住む、5組の夫婦の家族模様を描いている。うち3組は中学生 (と小学生) の息子を持ち、1組は夫が定年退職・再就職したばかりの、いずれも勤め人と専業主婦の組み合わせ。残りの1組は若い夫婦で、昼間も「洋風のねまき」を着ているような暮らしぶりに主婦たちは眉をひそめるが、子どもたちは唯一テレビのあるこの家に入り浸り、親を怒らせる。

以下にそれぞれの夫婦の会話をあげる。

#### (1) 大久保夫妻 (中学生の息子を持つ)

夫: ああ、今日亀戸のほうへ行くけど、くずもちでも買ってくるか。

妻: そうね。買ってきてよ。ああ、いいお天気ね。

#### (2) 原口夫妻 (中学生の息子を持つ。向かいの「林家」との間に行き違いがある)

妻: あのね、お向かいの子、挨拶しても返事もしないだよ。

夫: ふうん。どうぞしたんやろ。

妻: だってさ、ふたりともだよ。ちゃんとあたしの顔見てそれで知らん顔していっちゃったんだよ。ね、林さんの奥さんまだ昨日

のこと根に持ってるんだらろうか。

- (3) 富沢夫妻（夫は定年退職後再就職した。酔って帰宅する夫と迎える妻）

妻：あら、あんたまた飲んできたのね。

夫：ははは、今度は大丈夫だ。おれのうちだよ。いい気持だ。

妻：なにがいい気持ちなのよ。

夫：ああ、いい気持だ。黙ってろい。

- (4) 丸山夫妻（若い夫婦。引っ越すことになり準備をしている）

妻：ねえ、あんた、できた↑

夫：今やってるよ。トラック何時にくるんだい↑

妻：三時ごろまでに来るわよ。早くやってよ。

- (5) 林夫妻（中学生と小学生の息子。帰宅した夫に妻は子どもに関する愚痴を述べる）

夫：どうした。

妻：わたしのいうことなんにも聞かないのよ。

夫：なんだ↑

妻：いけない、いけないっていうのに、なにかっていうとすぐにお隣にテレビ見に行くのよ。今日だって英語に行ってるもんだと思ってたら、またずっとお隣なの。英語いきやしないのよ。ほんとに困っちゃう。

（叱られた子どもたちが出かけたまま帰らない）

妻：どこ行ったんだろ。ねえ、どこいっちやったんでしょう。

夫：うん。

妻：あたし、ちょっと行ってみてきます。

夫：いや、おれが行く。

いずれの夫婦も敬語や丁寧形を使わずに話しているが、最後の林家の妻のみ普段は非丁寧形だが、場面によって「です」「ます」形を含む丁寧形の発話もしている。この妻は、他の主婦たちに誤解され、「あの奥さんインテリみたいに『あたくし』なんて言ってるけどみかけによらないらしいわよ」と評されている。同じ勤め人の夫婦ではあるが、他家の子たちが学生服のみで登場する中で、子どもにお揃いのセーターを着せ、映画の最後ではテレビも買うなど、他家とやや隔絶した暮らしぶりの夫婦として描かれている。

なお、非丁寧形の文末形式についていえば、原口妻以外は「なの（よ）」「体言ね」「動詞てよ（依頼形）」などのいわゆる女性的とされた文末形式を用いて話している。原口妻だけが「だよ」「だろうか」という中性的な形式を使うが、この妻も、たとえば林妻に対しては以下のように丁寧形を使って話す。

いえね、うちのおばあちゃんったらまったくいやんなっちゃうんですよ。会費ね、もうとつくにいただいてあるって、今になって言うんですのよ。ほんとに申し訳なくて。なんて言っておわびすればいいか。ごめんなさいませね。奥さま。

遠藤（2010）は1947年から1956年までに公開された9本の映画の登場人物について夫は敬語を使わず、妻は敬語を用いるのが基本であると報告している。しかし、59年の『お早う』では、丁寧形で話す妻もいるが、むしろ敬語・丁寧形を使わずに夫に話す妻のほうが多いことが見て取れる。

## 2.2 60年代～70年代の夫婦の会話

さて、それでは60～70年代の妻は夫に対してどのような話し方をしていたのであろうか。以下に列举する。

(6) 夫30代会社員⇔妻30代無職『娘・妻・母』成瀬巳喜男 1960

夫：簡易保険が来月で満期だね。

妻：あら、そうでしたか。ねえ、あたし着物一枚ほしいな。

夫：冗談じゃないよ。いくらだと思↑

妻：いくら↑

夫：五千円だよ。二十年もかけてねえ。

妻：せっかく保険かけておいても何にもならないわねえ。世の中が  
変わっちゃうと。

(7)妻20代？幼稚園教諭⇔夫30代中学教諭『娘・妻・母』成瀬巳喜男  
1960

妻：ねえ、思い切ってアパートに行かない↑

夫：アパート↑

妻：おかあさんと別れて。親子だってたまに合うほうが仲良くやっ  
ていけると思うわ。

夫：しかしお母さん一人おいて。

妻：生活費は送るわよ。さびしければ下宿人をおけばいいわ。下宿  
代だってはいるし。

夫：おまえがそれを言ってみろよ。

妻：そりゃ、あなたが言うのよ、あなたずるいわ、わたしばかり悪  
者にして。

(8)夫20代写真家⇔妻30代喫茶店主『娘・妻・母』成瀬巳喜男 1960

夫：そんなに怒るなよ。な、美枝。おれが悪かった。だから謝って  
るんだよ、ね。

妻：あやまるようなこと、なぜするのよ。店の女の子のお尻にさわ  
るなんて。そういう下劣なことをする男、あたしは大っきらい  
なの。

夫：だからさ、ついふざけて、ちょっと。

妻：なにがついちよつとなのよ。とにかくあたしの気持ちのおさま

るまで一週間ばかり旅行してきます。

夫：ねえ、勘弁してくれよ。

妻：こどもの喧嘩じゃないのよ。ごめんなさいで済まないわ。

『娘・妻・母』はそれぞれ成人した二男三女を持つ坂崎家に起きた家庭内のエピソードを通して、財産権を主張する子どもたちと、老いた母の行く末を悲観的に暗示し、いわば新民法下での家族のありかたについて問題提起した作品。前掲の(6)(7)(8)はそれぞれ結婚した長男、次女、次男夫婦の会話である。すでにどの妻も基本的には夫婦間では非丁寧形を使っているが、(6)(8)では一部丁寧形が用いられている。(6)(7)は姑が同居する家庭だが、どちらの妻も姑に対してはいうまでもなく丁寧形で話す。どの会話でも尊敬語形、謙譲語形などの敬語はまったく現れない。

(9)妻20代会社員⇔夫20代？会社員『秋刀魚の味』小津安二郎 1962

妻：ブドウ食べる↑ 帰りに買ってきたんだけど。

夫：明日食うよ。眠いよ。床ひけよ。

妻：ちょっと待っててよ。あたし食べるんだから。

自分でひいてよ。

(9)は共働きで子どもはまだいない若い夫婦の会話である。妻は夫に敬語や丁寧形はまったく使っていない。同じ作品で、未婚の娘が父に「お茶漬けあがる↑」と話す例が見られるが、こちらは「食べる↑」と非敬語・非丁寧形になっている。なお、ともに遠慮のない関係であるからだろうが、夫の非丁寧形・命令形の高圧的な発話が目立つ。

(10)妻20代無職⇔夫20代会社員『私は二歳』市川崑 1962

(場面①)

妻：たあちゃんおしっこもらさなかった↑

夫：さっきさしたばかりだよ。

妻：ちっこって言うとおとなたちがあわててかまいに来るの、知ってるのよ。サークルから出たいもんだから。あーら、おひるごはん、こんなに残して。だめじゃない、全部たべさせなくちゃ。

夫：食わねえんだよう、なんて言ってもさ。

(場面②)

妻：痛いのかしら、かまれたところ。お医者さん大丈夫だって言ったんでしょ↑ 人差し指に犬の歯形が二か所ついてて、血はほんの少ししか出てないって、赤チンつけてくださったでしょ↑

夫：犬が狂犬病でさえなければ、こんな傷はほっておいても直る。犬を調べるのが先決問題だっていうから、あの犬の持ち主をずいぶん探しまわったぞ。

2歳の子を持つ夫婦が子どもについて話している。夫は会社員で妻は専業主婦である。通常は妻は夫に対して敬語も丁寧形も用いないが、犬に噛まれた子への対処について夫をなじる場面②、また子を迷子にして夫になじられ反論する場面などでは丁寧形を用いている。

子どもの手当てをした医者については「言った」という常体、「くださった」という敬語両方が現れる。

(11) 妻30代無職⇔夫30代会社員『女の中にいる他人』成瀬巳喜男

1966

(場面①)

妻：杉本さん、とうとう電話かかってきませんわね。まだお帰りになっていないのかしら。

夫：帰ってれば、なんとか言ってくるはずだよ。

妻：そうねえ、たいしたことじゃなかったのかも知れませんわね。

(場面②)

妻：酔ってらっしゃるの↑

夫：いや。



妻：あなた、杉本さんとこ、寄ってらしたの↑

夫：いや。

妻：今夜あたりほんとはお通夜なんでしようけどね。

夫は会社員、妻は専業主婦で鎌倉に姑も同居して一家を構えている。この夫婦の場合は妻は夫にも姑にも、基本的に敬語や丁寧形を用いて話す。「酔ってらっしゃるの↑」「寄ってらしたの↑」など尊敬語形を用いる発話では文末は非丁寧形になっている。

(12)妻20代?⇔夫30代?へアブラシ職人『どですかん』黒澤明 1970

妻：なんだね、一本ぐらい。そんな細っこい毛、少しぐらい数がちがったってどうってことないじゃないか。あたしゃ、おまえのすること見てると足の裏がむずむずしてくるよ。

夫：そうかもしれないけどね、三十本にしないとおれの気がすまないんだよ。

『どですかん』は架空のスラム街に住む数組の家族を描くが、上掲のように、妻が夫に対して一切の敬語や丁寧形を使わない職人夫婦や日雇作業員夫婦が登場する。一方で、以下の(13)のように、妻が丁寧形を用いて話す夫婦も登場する。

(13)妻40代?内職⇔夫40代?無職?『どですかん』黒澤明 1970

(場面①)

妻：手術がうまくいって、四か月近くものんびり寝たうえ、まだしばらく寝てろってんじゃない。ああ、あたしゃ物心ついてこのかた、こんな幸せな目にあったのははじめてだよ。でもねえ、退院して帰ってきて気になることが一つあるんだよ。かつ子がおどろくほど痩せて、顔にへんなやつれがでてるじゃないか。

夫：あたりまえだよ。おまえの分まで一人で稼いでいたんだからな、

かつ子は。

妻：でもそればっかじゃないよ、この様子は。

(場面②)

妻：どっちにしますか↑産ませますか↑おろしますか↑

夫：そりゃ、おまえ、産ませる手はないね。年も若すぎるし、世間体もあるし、ここは倫理学よりも法医学的処置をとるほうが、合理的だと思うね。

妻：わかるように言ってください。おろすんですね。

夫：つまりそうだよ。

妻：そのお金はどうします↑

夫：それはしよせん、おまえの妹に借りるほかはあるまい↑

妻：でも、わたしの入院や手術で借りるだけ借りたばっかですからねえ。

この妻は、退院して家に帰り休んでいる場面①では非丁寧形・中性文末形式で話しているが、後半自分の入院中に留守を預かっていた姪(かつ子)が妊娠し、その対応について夫に迫る場面②、さらにその後、姪が傷害事件を起こし警察に呼ばれているのに、口先ではインテリ風な言辞を弄しながら酒を飲むだけで無責任な夫を難詰する場面などでは丁寧形を用いる。

(14)妻17歳無職⇨夫22歳警備員『赤ちょうちん』藤田敏八 1974

妻：あたしのこと信じられないの↑

夫：なににもそんなこと言ってないじゃないか。

妻：でもあたしの味方してくれなかったじゃないの。

夫：そんなこと言うなよ。おれが払ったんじゃねえんだからわかんないだろ。

妻：信じてないんだわ。あたしのことなんか全然信じてない。

夫：馬鹿。

(15)妻30代店員⇄夫30代元炭坑員『幸福の黄色いハンカチ』山田洋次

1977

妻：ごはん食べる↑ あたしきついから横になるよ。

今度は気をつけるから。今度は必ず産むから、勘弁して。ね。  
ねえ、いったいどうしたのよ。あたしが前に流産したこと怒つ  
てるの↑ ねえ。そうなの↑

夫：おれは、隠し事する女は嫌いだ。

妻：あんたが何にも聞かなかったからよ。何も言わなくてもいいこ  
とだと思ったのよ。そうじゃなかったの↑

(14)(15)の夫婦は年代は違うが、どちらも係累を持たない男女が、いわば「家」とは無縁に結婚したという関係である。『どですかん』も含め、70年代の映画作品ではこのような夫婦が描かれることが多くなった。夫婦間のストレスが互いへの難詰となるという場面だが、(14)(15)では、『どですかん』の中年夫婦のように難詰が丁寧形で行われることはない。「の」「のよ」などの女性形式の終助詞は使われるが、(15)では、「横になるよ」という中性的な文末形式も用いられている。

(16)妻40代？デザイナー⇄夫50代？政治家『人間の証明』佐藤純弥

1977

妻：恭平のことはあきらめてください。

夫：そうはいかないよ。

妻：人をひき殺して海に捨てたんです。

夫：なに。

妻：だからあたしがニューヨークへ逃がしました。

夫：取り返しのつかないことをしてくれたな。

妻：もう、あなたの政治力でも恭平はとりもどせません。あの子と  
ふたりで新しい生活を始めます。たとえ野垂れ死にをしてもあ  
なたにご迷惑はかけません。

夫：おまえの名前でハワイに土地を買ってある。あれを持っていきなさい。

(17) 夫60代？実業家⇔妻50代？無職『配達されない三通の手紙』野村芳太郎 1979

夫：なぜ止めなかったんだ。恵子は、あんな男のところへ紀子連れていくなんて。どういう考えだ。

妻：それは無理ですわ。紀子が自分でいく気なんですから。

父：紀子に男を見る目なんかありません。あの男にはまるで盲目だ。そんなことは三年前のことでわかってるじゃないか。すぐに追いつきなさい。

母：でも麗子のところ出たという電話がありましたから。

(18) 夫20代会社員⇔妻20代無職『配達されない三通の手紙』野村芳太郎 1979

夫：たのむよ。五十万でいいんだ。それぐらいの金あるだろ。出してくれよ。

妻：五十万↑何にお使いになるの↑

夫：おれが頼むのに、いちいちわけを言わなきゃ出してくれないのか。

妻：あなた。

夫：頼むよ。何とかしてくれ、頼む。

妻：無理だわ。

夫：何が無理だ。

妻：わけも言わずに五十万よこせだなんて、最近のあなた見てるとあたしとっても心配なんです。銀行のうわさ聞きました。お父様なんておっしやっただと思う↑ 思ったとおりの男だって。

(16)は有力な政治家の夫と有名なデザイナーの妻、(17)(18)は萩の財閥

一家の当主夫婦と娘夫婦（いずれも妻は職業を持たない）の会話である。40代～50代の中年の夫婦では基本的に妻から夫へは丁寧形が使われているが、敬語は用いられない。これに対して夫は非丁寧形でも答えるが、「～なさい」や「ません」など丁寧な言い方を交えているのが特徴的である。一方、20代の若夫婦の場合、妻からは前掲の『女の中にいる他人』（1966）と同じく「敬語形＋非丁寧形」や丁寧体が用られているが、母が「無理ですわ」と丁寧体でいうのに娘は「無理だわ」と非丁寧体を用いるなど、若い人の敬語のレベルは下がっている。また夫に対して「お使いになる」と尊敬語形を用いるが、一方で「思う↑」と常体でも話しかけている。

50年代末を含む60～70年代の妻から夫への敬語は、まず親世代と別居して夫婦のみで暮らしている若い世代中心に敬語・丁寧形をほとんど用いないという夫婦もすでに存在したこと、また一方で、特に比較的高い社会階層に属していたり、舅姑と同居しているような夫婦では妻は夫に対して丁寧形を用いて話すものだと、実態はともあれ共通に認識されていたらしいことがわかる。

### 2.3 80年代の夫婦の会話

戸張（2010：116）は、以下にあげる（19）の会話を引用し、1983年の映画『家族ゲーム』に登場する家族の妻（30代）が夫に対して丁寧形を用いて話すのが尊敬語形などは用いないことを指摘した。

（19）夫30代会社員⇔妻30代無職『家族ゲーム』森田芳光 1983

夫：久しぶりだな、ふたりでここに来るの。

妻：そうですね。

夫：家庭教師のことだろ。

妻：茂之がどのくらい言うことをきかないのかわからないんですけど、あんなに。あなた見てないから。

この妻は映画の中で、息子には敬語や丁寧形を用いないが、夫を含めそ

れ以外の人には常に丁寧形を用いて話している。

80年代に入ると、60年代以後に主流となった夫婦に二人の子どもというような核家族の問題を風刺的に描いたり、その崩壊を描く映画が現れる。この『家族ゲーム』や次にあげる『逆噴射家族』（1984）などもそうした1本である。『お葬式』（1984）も、妻の父の葬礼を追って描き、死を送る家族や周囲のありようを風刺的に描いたものである。これらの映画の中では妻は夫にどのように話しかけているだろうか。

(20)妻30代無職⇔夫40代？会社員『逆噴射家族』石井聰互 1984

(場面①)

妻：あたしがいいっていうまで、電気消して目つぶってて。

夫：どうして↑

妻：いいから、いいから早く。

夫：いいよ。

妻：まだ見ちゃだめよ。まあってね。まだだめよー。いいわよー。バーン。お父さん、すばらしいハウスありがとう。あたし何もあげるものないけど、これがあたしからの入居祝い。受け取って。

(場面②)

妻：お父さん。起きてください。起きてくださいよ。

ほんとに御苦労さまねえ。でもね、お父さん、今日は会社いかなくっちゃね。おとといから何度も何度も電話かかってくるのよ。見て、こんなに掘れたし、白蟻は退治したし、さ、支度して、ご飯食べて、会社行きましようね。会社クビになったらあたしたち飢え死にしちゃうでしょう。だから、お願い。ね。

(21)夫40代？俳優⇔妻30代俳優『お葬式』伊丹十三 1984

(場面①)

夫：んー、じゃ、うちで出すわけか、葬式。

妻：そうしてよ。お願い。

夫：しかし、すごいことになるもんだなあ。今死んだとおもったら、もう葬式の段取りだもんなあ。

妻：悪いわね、あなたには。でもしょうがないわよ。あなたにとってはいちおう義理の父親ですもん、社会的にはね。

夫：じいちゃんが↑ おれの父親↑

妻：そうよ、世間に対してはね。

(場面②)

妻：浮かぬ顔してるわね。挨拶のこと考えて落ち着かないんでしょ  
う。

夫：いや、そんなことはない。

妻：大丈夫よ、あなた。あなたいつだってうまくいくんだから。

夫：これは桜だなあ。

妻：春はいいでしょうね。

夫：おれは春死ぬことにしよう。おれが焼ける間、外は花吹雪。いいぞ。

(20) (21) どちらの妻も基本的には丁寧形は使用せず、敬語も用いない話し方なのであるが、ときに「です」を使う文が入ったり、また場面によって丁寧形を基本とする話し方になることもある。非丁寧形文末には女性形式「のよ」「わよ」「わね」などが用いられる。

これらの夫婦は『家族ゲーム』も含め、60年代に結婚し、核家族として二人で子どもを育ててきて、子どもも小学生～高校生ぐらいに育ったところで、映画には教育問題や、親の同居、また死などを迎えて混乱を生じている姿が描かれる。『逆噴射家族』の場面②は会社に行き渋る夫を妻がなだめることばで、「ください」という依頼形、「ましよう」という勧誘形、さらに終助詞「ね」の多用は相手を立てつつ寄り添うという、あたかも幼い子どもをなだめるような趣がある。

引き続き80年代夫婦の会話をあげる。

(22) 妻50代⇔夫50代 刑事『近頃なぜかチャールストン』岡本喜八

1981

妻：いつ入るんだっけ、退職金。

夫：八月十五日だ。

妻：なんだあ。

夫：何買うんだ。

妻：もう買った、きのう。

夫：何買ったんだ↑

妻：二十六インチのテレビと、クーラーと、スクーターとダブルベッド。

夫：ダブル、

妻：そう、二、三んち中に届く。どしたの↑

夫：おまえ、長生きするよ。

喜劇的に描かれているのだが、仕事に出かける夫を寝そべってテレビを見ながら見送る妻は、すべて非丁寧形、疑問の「の↑」以外女性的な文末形式はまったく現れず、終助詞などもあまり使わないぶっきらぼうな物言いをしている。この妻は映画中では夫に理解のない、だらしのない困った妻として描かれる。妻の物言いは、このような妻を否定的に表現するものとして設定されているとも考えられる。

(23) 妻30代無職⇔夫40代? 会社員『時をかける少女』大林宣彦 1983

(場面①)

妻：地震、地震よ。和子(娘)早く。

夫：おい、落ち着くんだ、庭へ。

妻：はい、早く。

夫：火は消したか。

妻：はい。お父さん早く。

夫：だいぶ大きかったな。もう大丈夫。はじめが危険なだけだから。



妻：でも揺り返しがくるんじゃないやありません↑ もう少しここにいたほうが。

夫：揺り返しのほうが大きいってことはないでしょう。風邪引くとつまらんから家はいろいろ。

妻：はい。さ、じゃ入りましよう。

(場面②)

妻：ああ、まったく和子にもこまったものですわ。

夫：何が↑

妻：あんなんでお嫁にいきそびれたらどうする気かしら。大学に残ってねえ、薬学だとかむずかしい学問続けるなんて、お化粧っ気もまるつきりないんですから。

夫：ま、好きなようにさせておくさ。

(24)妻30代無職⇔夫30代?住職『さびしんぼう』大林宣彦 1985

妻：とにかく、たまにはあなたからもびしつと言っていただかなくては。自宅謹慎だなんて、あたし恥ずかしくて、今日のところはお墓のお掃除をさせておきますけれども、あの子もそろそろちゃんと修行をしたほうがいい年頃なんじゃないんでしょうか?

夫：・・・・(読経)・・・・

妻：まったく、とぼけて。

(23)(24)は大林宣彦が80年代に発表した「尾道三部作」のうちの2作である。これらの作品は尾道を舞台としているが、方言ではなく東京弁由来の「標準語」が使用されている。

どちらも高校生を主人公に青春を描いた作品なので、夫婦が会話する場面は少なく、おもに専業主婦の母親が子どもについての悩みや愚痴を父親に述べるというような場面だが、ともに丁寧形が用いられ、(24)では「言っていたく」と敬語も使われている。

(25) 夫30代会社員⇄妻30代インタビュアー『ウホッホ探検隊』 根岸  
吉太郎 1986

夫：子どもたちも大きくなってくね。

妻：久しぶりに会うとそう思うんでしょけど、あたしなんか、いつたいつ大きくなってんだかまったくわかんないわ。

夫：何にもしてないのにな。

妻：仕事でなんかあったんですか↑

夫：仕事は順調だよ。来年に向けてまた画期的な新製品が出るんだ。チューブ容器のカルシウム食品なんだ。まずい、まずい、まだ話せる段階じゃないな。仕事じゃないんだ。

妻：(笑う) どうして仕事の話が出るとスパイみたいなしゃべり方になんのかしら。一回秘密のことだからって行って。ちゃんと話したいこと言ってください。

夫：仕事のときもそんな聞き方で他人から話を聞き出すのか↑

妻：そんなわけないわ。あたしが仕事してるのがいけないんですか↑  
こういうとこへ連れてきたのも、それが言いたかったんですか↑

(26) 夫40代? 医師⇄妻30代編集者『別れぬ理由』 降旗康男 1987

夫：まずね、泊りがけでいくときは連絡をするべきなんだよ。君は人妻なんだから。

妻：したわよ。あなたが前のホテルにいなかったんでしょ。

夫：午前中はいましたよ。

妻：行行って決まったのはお昼ごろなのよ。

夫：みつともないだろ、な、あんまりみつともないことはしないでくれ。

妻：みつともないことって、どういうことですか↑いいたいことがあるんだっちはつきりおっしゃってください。あたしのどこがみつともないんですか↑みつともないのあなたのほうじゃないの。札幌まで女わざわざ呼び寄せたりして。

夫：じゃおれも言わしてもらおうかな。おまえだって好きな男がいるじゃないか。かくさないで正直に言ってみよ。

妻：どうしてそんなこと言うんですか↑

夫：このごろ男から妙な電話がかかってくるし、あの背の高いのに送ってもらって手にぎりあってたじゃないか。人が知らないと思って。おれの眼はふしあなじゃないんだ、馬鹿にするな。

妻：あたしも。ねえ、馬鹿にしないでよ。あたしだってあなたのこと全部知ってるのよ。あの人がほかの奥さんだってことも。話し合ってたことだって、今度だって初めから札幌に連れてくつもりだってことだって。

(25)は単身赴任中の夫に愛人ができ妻に打ち明けようとする直前の場面、(26)は夫婦ともに配偶者以外の相手と関係を持っている夫婦が互いを責めあう場面で、ともにすれ違いがち、あまりうまくいってはいない夫婦の会話である。どちらの妻も通常は非丁寧形で夫に話すか、詰問の「ですか」、要求の「おっしゃってください」、確認の「でしょう」などは敬語や丁寧形で話している。相手と距離をおき、返答を迫るための敬語使用であると言えるが、(26)は、最後に互いに激昂してくると非丁寧形に戻っている。非丁寧形の場合も文末形式については、「わよ」「(な)のよ」を使い、夫の「馬鹿にするな」に対して「馬鹿にしないでよ」と返すなど、明らかに夫とは違う、女性的文末形式を使用している。

(27) 夫30代八百屋⇔妻30代八百屋『北京的西瓜』大林宣彦 1989

夫：留学生の奥さんだってさ、日本に来るにあたっては、その、な、だれか立てなきやいけないから。

妻：それ保証人でしょ↑

夫：まあ、そうだよ。

妻：お父さん、それ保証人なんだよ。え、この人がなんか起こしたらうちで全部責任持たなきやなんないんだよ。ハンコひとつで

さ、全財産なくした人がいるんだから。ね、これだきゃ、だめだよ。だめだよ、お父さん、これだきゃ、

夫：うるさい、おまえは、うるさい、おまえは。

妻：お父さん、だめだっていつてるのに。

中国の留学生の援助を献身的に行う夫に対し、一緒に八百屋を営みながら理解し支える妻だが、夫が留学生の保証人になることを止めようとする場面である。この場面のみならず、この映画では妻は「でしょ↑」という問いかけ以外には丁寧形や敬語形は一切使っていないし、文末も「だよ」という中性的なものが多い。夫と対等に同じ場で商店を営んでいるゆえの親しさや立場の近さゆえの選択であろうか。

80年代に家族や夫婦を描いた映画では、戦後一般化した夫婦と子どもの単位でそれ以前の家父長的な大家族から離脱した都市型の核家族が危機に陥ったり、崩壊していくさまが描かれ、このような家族や夫婦への問題提起が行われるようになってきた。これらの映画では、(25)(26)のように、夫婦がそれぞれに違った仕事を持っている場合も多く、専業主婦と勤め人という場合も含め、日常的に妻と夫がともに過ごす場面は少ない。これらの夫婦の多くの会話では妻は夫に対して非丁寧形で話す、特に何らかの主張や要求をするなど緊迫した場面では、非日常的な丁寧形を交えて話すということになるようだ。すべてを丁寧形で話す『家族ゲーム』の妻は、封建的な古風な家族観を背負っているというよりは、いびつな核家族の、いびつさがあらわになる場面での敬語選びを戯画的に体現させたものと言えようし、丁寧形の現れない『北京的西瓜』では家族は崩壊の危機を乗り越え、夫婦は理解しあう存在として描かれるのである。

#### 2.4 90年代の夫婦の会話

続いて90年代の夫婦の会話をあげる。

(28)妻40代？無職⇔夫40代？会社員『ふたり』大林宣彦 1991

妻：おかえんなさい。

夫：驚いたなあ、足音でもきこえたのか↑

妻：もう、まちくたびれました。

夫：三日目だよ、まだ。二、三日って言っただろ。

妻：二、三日と言いますとね、二日目を待ちますわ。

娘を事故で失って精神を病んでしまった妻が、出張から帰った夫に向かって言う。全体的におっとりとして、また夫に依存的な暮らしぶりのこの妻は、基本的に丁寧形で夫にしゃべると設定されている。

(29) 夫30代？会社員⇄妻30代？『未来の思い出』森田芳光 1992

夫：何寝てんだ、銀子。お帰りなさいぐらい言ったらどうなんだ。

妻：あ、待ってたんですけど、テーブルに夜食を作っておきました。

夫：おまえ、なんで競馬新聞なんか読んでるんだ。だれの影響なんだ。

妻：そんなんじゃないくて、あたしもなにか趣味を持とうと。あなたが株で儲けるならあたしは競馬でもうけようかなあ。

夫：女のくせに競馬なんかやるなんて。株式と競馬を一緒にするな。格が違うだろ、第一。証券会社の人間は株で儲けてるんじゃないんだ。

妻：そんな意地悪いわないで。やさしくしてよ。シャネルの19番の匂い。あたし今日夜間飛行なん、

夫：だからなんだってんだ、何を言いたいんだ。

妻：ただ、香水のにおいをあてただけです。うしろめたいの↑

夫：おまえはおれの女房なんだから香水なんかに詳しくなる必要ない。

(30) 夫30代？デザイナー⇄妻30代？『未来の思い出』森田芳光 1992

夫：お帰りなさいぐらい言ってくれよ。

妻：何よ、遅かったのはあなたのほうでしょ。男の人って結局おんなじ態度をとるのね。

夫：銀子↑このごろ二人だけの時間少なくなったよな。忙しさにまけてすれ違いばかりで、こんなことじゃあ、なんのためにおまえがおれのためにやってくれたのかわかんないよな。前はもっと遊んだな。思い切ってふたりだけの時間つくろうか。

妻：やっぱり、あなたは違うわ。よく気づいてくれたわ。あたしもそれが言いたかったの。じゃあ、今晚から時間をとってくれる↑

夫：もちろん。愛してるよ、銀子。

(29)(30)は同じ登場人物(銀子)が10年前にタイムスリップした後、それぞれ別々の人生を歩んだという設定で二組の夫婦の会話が描かれる。(29)の高給取りだが妻にはまったく理解のない夫には、丁寧形や、独白調の中性的な「～かなあ」(本調査の範囲ではもっとも早い出現である)や、「やさしくしてよ」などの気を引くような表現を交えて相手との距離を調節している。いっぽう、(30)は互いに理解し合っているという設定で「でしょ」以外は非丁寧形、女性的な文末形式使用はあるが比較的ストレートな物言いとなっている。

(31)妻40代⇔夫40代会社員『ひき逃げファミリー』水谷俊之 1992

妻：なんで車で行ったのよ。

夫：だってしょうがないだろ。途中でお得意さん拾ってく約束だったんだもの。

妻：しょうがないって、だからいったでしょ。あなたいつもそうやって家族粗末にしてるから、罰(ばち)があたったんだわ。

夫：ばか、そういう問題じゃないだろ。

妻：なんでよ、そりゃ、あんたはゴルフだ接待だって遊びまわってりゃいいけど、お父さんを世話してるのはだれなのよ。え↑、リクオ(息子)の世話するのはだれなのよ。

(32)妻40代?⇔夫40代?『ひき逃げファミリー』水谷俊之 1992

妻：お向かい変よ。いちんち中カーテン閉めっぱなしにして中が見えないようにしてるの。

夫：爺さんの具合でも悪いんじゃないのか↑

妻：きのうまでピンピンしてたわよ。それなのに今日は全然姿見せないの。なんかあったのよ。

夫：だったら病院へでもどこへでも連れていくだらう。

夫のひき逃げを一家で隠そうとする妻(31)と、それを覗き見している向かいの家の妻(32)の会話である。どちらも丁寧形はまったく使わない。特に(31)は事故を起こした夫への難詰であり、かなり緊迫した雰囲気もあるが、非丁寧形は「でしょ」のみである。この妻はほかに、事故の翌朝、後を不安に思い、渋る夫に「あなたは普通に会社にいらっしゃい」と丁寧形で促す場面があるが、それ以外はすべて非丁寧形である。

(33)夫30代?会社員⇔妻20代?『釣りバカ日誌5』栗山富夫 1992

夫：しかし、わが子ながらたいしたものだけ、あのドア体当たりであけちゃうんだものね。

妻：もうまるで、いのししの子みたいなんだから。うちの周りを檻でかこまなくちゃ、もうだめよ。

夫：檻か。ねえみち子さん、鯉太郎格闘技に向いてるんじゃないかな。え↑柔道とか、レスリングとかさあ。

妻：水泳どうすんの↑ プール申し込んだのよ。もう。

夫：うん、でも体形からみてなんか、格闘技のような気がすんだけどなあ。重心が低いし。相撲か、相撲もいいね。

妻：そんなに強くなれるのかなあ。

『未来の思い出』に引き続き、女性形式の非丁寧文末と、「かなあ」という中性的な言い方がともに現れる。夫も妻を「みち子さん」と呼び、「か

な」とか「ものね」などの文末形式によるやわらかい語調で話しているので、対等な感じがする。

(34)妻40代? ⇨ 夫50代? 小説家『静かな生活』伊丹十三 1995

妻：おかげですごく水はけよくなったわよ。

夫：あそこにもう一つふたがあることにどうして頭がいかなかったのか。

妻：いいじゃないの。

夫：よくないよ。ほら、ここで棒がつかえるだろ。このつかえたときに僕は気づくべきだったんだ。

妻：いいじゃないの。もう下水屋さんがなおしてくださったんだから。

(35)妻40代? ⇨ 夫40代? 会社員『Shall We ダンス?』周防正行 1996

妻：先生イギリスへ行っちゃうんでしょ↑

夫：なんでも知ってるんだな。

妻：あたしあなたにあやまらなきやいけないことあるの。探偵雇ってあなたのこと調べてもらったの。自分で確かめるの怖かった。あなたは真面目な人だから。あなたのこと愛してるから。ねえ、お願い、明日パーティに行行って先生と踊って。そしてダンス続けて。毎日つまらなそうに会社に行ってるあなた見てるより、いきいきしてるあなたを見てたい。あたしにもダンス教えて。あなたが先生と踊りたいと思ったようにあたしもあなたと踊ってみたいの。

夫：もういいかげんにしてくれ。おれはダンスはやめたんだ。

(34)(35)は比較的安定した夫婦の姿を描いている。これらの作品では、妻は夫に対してほぼ非丁寧形でのみ話している。ただし作家・大江健三郎の私小説を原作とする(34)では、妻が夫の自殺(の練習?)のような現



場を見つけ、「朝の4時半にいったい何をしてるんですか。」と言う場面がある。また、例示のとおり、その場にいない「下水屋さん」に対する尊敬語が現れており、社会的な地位のある有名な小説家の妻という立場が明示されているとも考えられる。ただし、それ以外に丁寧形・敬語形が現れる場面はない。

(36) 夫40代? 医師⇄妻38歳書道講師『失楽園』森田芳光 1997

(場面①)

夫：吉岡さんが循環器科の外科部長になった。なんかお祝い送って  
いてくれよ。

妻：はい、胡蝶蘭の花でいいですね↑

夫：いつも胡蝶蘭だな。

妻：じゃあ、何か。

夫：いいよ。それで。

(場面②)

妻：お帰りなさい。徹夜たいへんでしたね。お食事は↑

夫：いりません。眠い、です。大変、眠いです。

妻：あの、父のことではいろいろとありがとうございました。

夫：はい。

(37) 妻40代? 陶器デザイナー⇄夫50歳出版社社員『失楽園』森田芳光  
1997

妻：あたしたち、別れましようか。そのほうが、いいでしょ↑今別  
れたほうが、わたしも楽だし、あなたもすっきりするでしょ。

何かやり直すとしたらあたしももうギリギリの年だもの。

夫：しかし、どうして。そんなこと。突然言われても、困るよ。

『失楽園』では(36)の妻と(37)の夫が愛し合い、心中をはかる。(36)(37)はそれぞれ壊れる夫婦の会話である。(36)では妻はほぼ丁寧形による発話

だが、夫は場面により非丁寧形に終助詞がついた言い方をしたり、場面②のように丁寧形を使う場面もある。他人行儀な言い方も言え、この夫婦が感情的には離れてしまっていることが示される。この夫は絶対に離婚はしないという意味表明により不倫をした妻を罰する。いっぽう(37)の妻は通常はほぼ非丁寧形で夫に話すが、別れを切り出すこの場面では「ましようか」「でしょ」などの丁寧形を交えて話すことにより感情を排し、冷静さを保とうとしている。丁寧度が非常に高い、というほどの会話ではない。きわめて緊迫した状況で丁寧形が使われることもあるが一般的には非丁寧形で話す妻が多いという90年代後半の映画の中では、この映画の夫婦の会話はむしろ例外的である。

(38) 夫40代? ⇄ 妻30代? 『菊次郎の夏』 北野武 1999

夫：なんか、陰気臭い餓鬼だなあ。

妻：あたしが前にいたところの近所の子でさあ、おばあちゃんとふたりで暮らしてるんだよ。

夫：親、どうしたんだよ。

妻：父親はいないみたいよ。

夫：母親は↑

妻：どっかに働きにでてんじゃない↑

夫：なんだ、男つかまえてどっかいったんだあ。

妻：あんたんちの母親じゃないんだから。

夫：なんだと。てめえんとこだって三回も再婚してんじゃねえか、ばかやろう。

妻：大きなお世話だよ。

夫：おれだって大きなお世話だ、このやろう。

遊び人の「菊次郎」とその妻の会話であるが、どちらも非丁寧形であるのみならず、妻にも「(みたい)よ」以外に「～のよ」「～だわ」のような女性文末形式は現れず、「～だよ」という中性的な文末形式の使用が目立

つ。ただし妻の「あんた」という呼びかけに対し夫は「てめえ」、「ばかやろう」とか「このやろう」なども用いて、夫の発話は妻よりさらに荒々しい。ことばや内容は乱暴だが、関係としては親密とってよい夫婦である。

## 2.5 2000年以後の夫婦の会話

『北京的西瓜』『菊次郎の夏』などに見られる妻の中性的な文末形式「だよ」の使用は、前者は八百屋のおかみさん、後者は遊び人の女房ということで、一般的な勤め人など、いわゆる当時の中産階層のものではないとも言えないことはなかった。遠藤(2010:100)では1962年の『キューポラのある街』(浦山桐郎)で敬語を使わず、「だよ」「だろ」などの文末形式を用いて話す妻の例を紹介しているが、この映画は川口の鋳物職人の家庭が舞台で、いわゆる都市中堅のサラリーマン家庭とは、言語的な階層差があったことが考えられる。下町労働者の家庭を描いた『下町の太陽』(山田洋次1963)などにも敬語・丁寧形を使って話す夫婦や親子はまったく現れない。90年代までの妻の非丁寧形・中性文末使用の会話にはこのような階層意識の反映も感じられる。しかし、2000年以後の映画では、「だよ」を含む中性的な語尾の使用が、職業・年齢・階層を問わず多くの女性(妻)に見られるようになる。

(39) 夫20代放送作家⇄妻30代『みんなのいえ』三谷幸喜 2001

夫：お父さんは↑

妻：長一郎はだめよ。大工だもん。

夫：設計やんないの↑

妻：できないと思うよ。設計と大工は違うから。

(40) 夫60代？大工⇄妻60代？『みんなのいえ』三谷幸喜 2001

夫：民子もあれだな。昔から気が強かったな。

妻：どうしたの、急に。

夫：上のと違ってなんでも一人でやる子だった。

妻：自立心の強い子だからね。

(41)妻40代？医師⇔夫50代？小説家『阿弥陀堂だより』小泉堯史

2002

妻：ねえ、新しい仏壇買ってみようか↑これじゃさびしいもの。

夫：仏壇って高いよ。

妻：平気よ。ご先祖様がいたおかげで、今のあなたがあつて、わたしもあつて、このままここでずーっと暮らして、あたしたちもいつかご先祖様になれたらいいと思わない↑

夫：いいね。

『みんなのいえ』は若い放送作家夫婦が新居を建てるまでの顛末を喜劇的に描いている。(40)の夫婦は(39)の妻「民子」の父母である。どちらの夫婦も夫婦間では常に非丁寧形のみ使用している。娘は夫に対して父を「長一郎」と呼び捨てにしている。(41)は子どものいない中年の夫婦で、妻がパニック障害になったので、のんびりした田舎の暮らしを始めたところである。この妻も、夫に対して丁寧形を使うことは他の会話も含め、まったくなく、文末にも「わ」「のね」「かしら」のようなはっきりした女性形式はほとんど現れない。また(39)(41)では夫の発話にも「だ」「だな」「(だ)ぞ」などはまったく見られず、従来の夫たちの発話に比べると中性的であると言ってよい。

(42)妻40代？⇔夫40代？会社員『私のグランパ』東陽一 2003

(場面①)

妻：あなたは会社のことしか頭にないからそういうのよ。

夫：別に会社だけがおれの人生じゃないよ。

妻：そうかしらね。

夫：とげのある言い方するね。どうしたいって言うんだよ、結局。

(場面②)

妻：変な電話もあったし。なんかあったんです。きっと。

夫：携帯にかけてみりゃいいじゃないか。

妻：いえ。タマコからかかってくるの待ってます。わたし、待つのは慣れてるから。

(42)は夫婦と娘タマコの平穏な暮らしの中に刑務所帰りの祖父が現れ、その結果娘が街のやくざ抗争に巻き込まれてしまうという設定である。場面①を含む他の場面では妻は非丁寧形・女性文末形式で話しているが、娘が帰宅せず、誘拐が疑われるという状況下では「です」「ます」で話す。緊張・緊迫した状況下での丁寧形の使用というのはこれ以前の作品にも見られたところである。

(43)妻40代パート勤務⇔夫40代会社員『空中庭園』豊田利晃 2005

妻：コウ（息子）なんかさあ、どうしたいって聞いたって、エー、別にだし。何が食べたい↑って言ったって、エー、別になんでもだしねえ、あれって反抗期↑、まったく覇気のない反抗期よね。

夫：たまってるだろ。

妻：三万かあ、パートの時間増やそうかな。

夫：いいよ、おれが払うよ。

妻：ああ、もう疲れちゃったな。お休み、電気消してね。

(44)妻40代無職？⇔夫40代会社員・失業中『トウキョウソナタ』黒沢清 2008

妻：あたし、こないだ見ちゃった。あなたが公園で食事の配給にならんとど。あなた、失業中なんですよ↑

夫：知ってたのか。

妻：ええ。ずーっと前から。

夫：なんで言わない。

妻：言ったらあなたの権威が丸つぶれになるけど、それでもいいの↑  
つぶれちゃえ、そんな権威。

(45)妻20代？ウェブデザイナー⇨夫30代納棺師『おくりびと』滝田洋  
二郎 2008

妻：なんで言ってくれなかったの。

夫：言うのと反対するだろ。

妻：当たり前でしょ。こんな仕事してるなんて恥ずかしいと思わない  
の↑

夫：どうして恥ずかしいの↑ 死んだ人を毎日さわるから↑

妻：普通の仕事をしてほしいだけ。

夫：普通ってなんだよ。だれでも必ず死ぬだろ。おれだって死ぬし、  
君だって死ぬ。死そのものが普通なんだよ。

妻：理屈はいいから、今すぐやめて。お願い。あたし、今まで何も  
言わなかったよね。大ちゃんがチェロやめたって言ったとき  
も、田舎に戻りたいって言ったときも、笑ってついてきたじゃない。  
それは悲しかったんだよ、ほんとは。でも、あなたが好  
きだから、だから、今度だけはお願い。あたしの言うこと聞いて。  
て。

2000年代後半に入って作られた3本の映画であるが、(43)(44)は妻  
の立場から、夫と子どものいる核家族の暮らしへの一種の疑義を描き、  
(45)は若い夫の納棺師という職業の選択とそれを受け入れる妻の姿を  
描いて評判になった。どの映画でも妻は夫に対して「でしょ(う)」以  
外は非丁寧形のみを使用。中性的な語尾も散見する。「~の↑」「~よ  
ね」などは現れるが、「~かしら」「~だわ」などのような女性的な語  
尾もほとんど現れない。これは、前掲の『みんなのいえ』『阿弥陀堂だ  
より』にもすでに言えることであった。

(46) 夫30代失業中⇨妻30代『歩いても 歩いても』是枝裕和 2008

夫：さっき、大丈夫聞けるわよ、って言ったろ、かあさん。あれさ、  
ぜったい一人ん時かけてるんだ、レコード。それ考えるとなんかぞっとするよ。

妻：そんなことないわよ。それくらい普通でしょ。

夫：そうか↑

妻：隠れて聴く曲くらい誰にだってありますよ。

夫：ふーん、そんなものかね。

妻：そうですよ。

(47) 夫30代自動車販売業⇨妻30代『歩いても 歩いても』是枝裕和  
2008

夫：楽しそうだったね、おばあちゃん。

妻：そりゃそうよ、皆でにぎやかに集まってあげるのが一番の親孝行。

夫：点数稼いだんじゃない↑

妻；どうかなあ、なかなかオツケーしないのよね。

夫：お兄さんの部屋そのままにしておきたいんだろ。気持ちは分らないけどね。

妻：いい身分よね。こっちなんか生きてる人のことで精いっぱいだっていうのに。

夫：どうせ気にかけるんなら、生きてる娘にしてくれって↑

妻：当り前よ。死んだ兄さんが老後の面倒みるわけじゃないんだから。

(48) 夫70代？元医師⇨妻70代無職『歩いても 歩いても』是枝裕和  
2008

夫：いつ買ったんだ↑

妻：レコードですか↑

夫：うん。

妻：ちょうどあの頃ですよ。板橋のあの女のアパートまで、リョウタおぶっていったんですよ。そしたら部屋の中からあなたの声が聞こえて来て、(歩いても歩いても＝歌う)邪魔しちゃ悪いと思って、そのまま帰ってきて、次の日駅の西口のカナリヤ堂で買いました。使った手ぬぐい広げて干しといてくださいね、そのままにしないで。

『歩いても歩いても』は亡くなった長男の命日に次男夫婦、その姉夫婦が老親夫婦の住む実家に集まる1日を描く。(46)は実家での次男夫婦の会話。妻は丁寧形で話しているが、この場面以外は夫に対してはすべて非丁寧形である。妻はもちろん、舅姑である次男の老親には丁寧形で話すのであり、この場面ではそばに舅姑がいるわけではないのだが、夫の実家での会話というようなことが影響しているのかもしれない。(47)は実家からの帰りの車中、長女夫婦が話す場面であるが、「かなあ」のほかは「よね」という女性文末形式が目立つ非丁寧形である。(48)は元開業医とその妻である老夫婦の会話である。年齢からいうとこの夫婦が結婚したのはおよそ40年前、1970年ごろのことと考えられるが、前述のとおり、この時代は未だ妻が夫に対して敬語形や丁寧形を用いて話すべきだという認識も残っていたと考えられる。医師とその専業主婦の妻という比較的高い階層の夫婦関係にあって、ことばの上にもその意識を反映させて40年間を過ごしてきた夫婦として描かれているのであろう。話の内容は夫の過去の浮気について語っていて、夫にとってはなじられるように感じられる話題であるが、妻は終始丁寧形を用いることにより、さらにその効果をあげている。映画の中で妻と夫が1対1で話す場面はここのみ(しかも夫は入浴中、妻は脱衣場で話している)だが、他の場面で妻は家族に向かっては丁寧形で話すことはない。

(49)妻30代⇔夫30代写真家『今度は愛妻家』行定勲 2009



妻：トマト食べてない。

夫：トマトね。いらない。

妻：だめだよ。 トマトは体にいいんだから。

夫：しつこいな。いらないって。

妻：でもトマトはねリコピンが入っていていいんだよ。 心臓疾患や  
動脈硬化の原因になる活性酸素を消し去ってくれるんだって。

肌の老化も防ぐよ。 はーい。

(50) 夫49歳元会社員・運転士⇔妻40代ハーブ店経営『レイルウェイズ』

錦織良成 2010

妻：電車の運転手さんになるって専務さんにそういったの↑

夫：うん、まあ、そんなとこ。

妻：好きだったもんね、電車。 昔部屋に本とか写真とかかかしてた。

結婚してから一度も電車の「で」の字も口にしないから、すっかり忘れてんのかと思ってた。

夫：なんだ、知ってたのか。

妻：やってみたらいいと思う。いつかあなたそんなこと言うんじゃないかと思ってた。

(49) (50)ともに妻の夫に対する発話は他の場面も含め、基本的に非丁寧形である。(49)では文末は言い切り、もしくは「(だ)よ」、(50)も疑問形を除き、すべて終助詞なしの言い切りになっていて、従来女性らしいとされた形からは隔たっているが、語調などが荒々しいということはなく、ごく自然な選択として中性的文末形式が用いられているようだ。

2000年以後は、夫に尊敬語形を使って話す妻はほぼ皆無と言える。丁寧形についてはまだ、これをおもにを使って話す妻はいるが、高齢の夫婦であったり、また舅姑と同居したり、舅姑を意識したりするような場面での会話であったりすることが多い。多くの夫婦は非丁寧形で話しているが、そればかりでなく、90年代までの女性的な文末形式に加えて中性的な文末形

式がよく使われるようになり、さらにはいわゆる女性的といわれる文末形式よりも中性的な形式をよく用いる妻も若年、中年にかかわらず出てきているというのが最近の傾向である。

### 3. まとめ

妻が夫の下位にあり、上位の夫に対して敬語を使って話すことが、旧来妻たちに求められた「美しい」日本語の姿であるとするならば、そのような「規範」を我が物とした妻たちは話の内容や、夫への感情の状況などにかかわらず、常に敬語形や丁寧形を使って話すことになっただろう。遠藤(2010)の報告した50年代の妻たちや、小論であげた『女の中にいる他人』『配達されない三通の手紙』『時をかける少女』『家族ゲーム』『さびしんぼ』『ふたり』など、そして現代の『歩いても 歩いても』の老妻などはいわばこのような妻たちである。本調査の範囲では彼女たちは例外なく専業主婦として夫と暮らす妻たちである。実際に常に夫に対して敬語や丁寧形を用いる妻がどの程度存在するのかはともかく、少なくとも役割語としての妻のことばのタイプとして、このようなことばは現代に至るまで、脈々と存在し続けているということになる。ただし、細かく見ていくと、70年代の『配達されない三通の手紙』あたりまでは丁寧形とともに、あるいは非丁寧形と並立する形で夫や話題の第三者に対して敬語を使う妻が登場するが、これ以後は丁寧形は使っても敬語形が現れることはまれという状況に変わっていく。

いっぽう、実はすでに遅くとも50年代末には、夫に敬語を用いない妻の会話も多く存在していた。これらの妻は非丁寧形・女性文末形式を用いて夫に話しかけるのが普通だったが、ときに会話中に「です」「ます」を交えたり、または場面によって丁寧形と非丁寧形をスイッチングする。50年代の『お早う』、60年代の『私は二歳』、70年代の『どですかん』、80年代の『お葬式』『逆噴射家族』『ウホッホ探検隊』『別れぬ理由』、90年代の『未来の思い出』、そして00年代の『わたしのグランパ』『歩いても歩いても』と、年代を問わずこのような妻が登場する。用例から見るとおり、彼

女たちが非丁寧形から丁寧形にスイッチングするのは、子どもについての問題を夫に話すとき、夫の態度や行動について詰問や批判をするとき、夫に批判や不満を持ちながら自分の態度や行動を表明するとき、そして夫婦子ども以外の親戚や舅姑を意識して話を運ぶときなどである。夫の下位者として敬語を使うわけではなく、緊張関係の中で丁寧形によって夫との距離をとり、距離をとることによって自分の主張を相手に聞かせようとする一種のストラテジーとして丁寧形が使われている。これらの妻たちは、丁寧形と、親密さを感じさせる非丁寧形をスイッチングすることにより夫との心理的な距離の調節も行っているのである。なお、そのように見たとき、子どものことを夫に訴える場面しか出てこない『時をかける少女』『さびしんぼう』や夫の昔の浮気をそれとなくなじる場面のみ『歩いて歩いても』の老妻なども実はこちらの使い分けタイプであるのかもしれない。「美しい」はずの敬語は、ここではむしろ夫に対する「武器」となる。このような「武器」は『失樂園』の夫のように男性も使うことがある。

しかし、90年代以後、緊迫した状況であっても夫に対して「でしょ(う)」を除いては丁寧形をほとんど使わず、非丁寧形女性文末形式を用いて話す妻たちが映画では主流となる。『ひき逃げファミリー』『釣りバカ日誌5』『静かな生活』『Shall We ダンス?』などである。これらの映画は主題が夫婦そのものではなく、軋轢があっても最終的には夫婦が和解して暮らすようすが描かれる。現代のことであるから妻もさかんに活動はするが、従来型の性別役割分業や核家族のあり方に対しては肯定的なところが共通している。

『お早う』『どですかん』『近頃なぜかチャールストン』『北京的西瓜』『菊次郎の夏』などに現れるとおり、50年代末から90年代にかけて、夫に対して「だよ」「だね」など中性的な文末形式をもっぱら使う妻もすでに存在している。これらの妻たちは、前述の通り、一般的な中産階層の勤め人などの妻でなく、職人や小売商などの妻、遊び人の妻であったり、あるいは妻自身ががさつだったり、威張ったりというやや特異な性格の持ち主と設定されることもある。夫婦仲はむしろ親密で、夫と対等に言い合うという

ような夫婦である。

このような中性文末形式の出現の様相が変化するときしは90年代の『未来の思い出』『釣りバカ日誌5』の「かな(あ)」の使用にもすでに見られるが、2000年以後文末形式の様相が大きく変化する。00年代の映画には、『みんなのいえ』『阿弥陀堂だより』『空中庭園』『おくりびと』などのように非丁寧形女性文末形式に交えて中性文末形式を使う妻が、年齢にかかわらず、まず現れ、『今度は愛妻家』や『レイルウェイ』のように、「だよ」や言い切りの中性文末形式で話を運ぶ妻たちも現れるのである。これらの妻たちの設定は、ある特異な階層に属するとか、特異な性格付けをされているというわけではないし、彼女たちの言辞になんらかの特別な表現意図がこめられているわけでもない。単に自然に中性的な文末選択が行われているのである。

現代の日本語、特に女性のことばが中性化しつつあることはさまざまな調査でしばしば報告されるが、2000年以後の映画に見られるこの変化も、その表れのひとつであるとすることができるし、対する夫のことばも、おのずとそれ以前、妻が夫に対して敬語を使い、夫は妻に対して言い切りでぶっきらぼうに對していた夫婦のものとは違って来る。

映画に描かれる夫婦関係が変化したがゆえにことばも変わるのか、ことばが変化したゆえに夫婦の関係が変わるのかはにわかには判断しがたいところではあるが、社会的な女性のことばの中性化が映画の妻のことばに反映しているのは確かであろうし、映画における妻のことばの中性化は社会における女性のことばの中性化が現に行われつつあるのだろうことを裏付けるものと言えよう。その結果として、妻の敬語の使用と夫の不使用によってあたかも上下であるような夫婦関係の非対称性に変化が起こり、ことばの上でも関係としても対等・親密な夫婦の関係が実現するとすれば、それをもたらすことばこそが「美しい」日本語である、と言ってもよいのではないだろうか。

## 参考文献

- 遠藤織枝 (2010) 「映画の敬語 その1 戦後1940年後半～1960年代」遠藤織枝・桜井隆編『日本語は美しいか』pp. 079-093 三元社
- 戸張さきよ (2010) 「映画の敬語 その2 1980年代～2000年代」遠藤織枝・桜井隆編『日本語は美しいか』pp. 115-127 三元社
- 小林美恵子 (2009) 「授業データベースによる実態調査一文末形式の『中性化』の様相一」『ことば』30号 pp. 64-81 現代日本語研究会

## 参照 DVD 一覧

作品名	監督	製作年	配給	DVD 販売元	発売年・月
『お早う』	小津安二郎	1959	松竹	松竹ホームビデオ	2005・8
『娘・妻・母』	成瀬巳喜男	1960	東宝	東宝ビデオ	2005・7
『私は二歳』	市川崑	1962	大映	角川ヘラルド映画	2007・1
『秋刀魚の味』	小津安二郎	1962	松竹	松竹ホームビデオ	2003・7
『女の中にいる他人』	成瀬巳喜男	1966	東宝	東宝ビデオ	2005・7
『どですかん』	黒澤明	1970	東宝	東宝ビデオ	2003・1
『赤ちょうちん』	藤田敏八	1974	日活	日活	2004・5
『人間の証明』	佐藤純弥	1977	東映	角川映画	2006・10
『幸福の黄色いハンカチ』	山田洋次	1977	松竹	松竹ホームビデオ	2007・5
『配達されない三通の手紙』	野村芳太郎	1979	松竹	松竹ホームビデオ	2005・12
『近頃なぜかチャールストン』	岡本喜八	1981	ATG	ジュネオン・エンタテインメント	2005・7
『時をかける少女』	大林宣彦	1983	東映	角川ヘラルド映画	2006・10
『家族ゲーム』	森田芳光	1983	ATG	パイオニア LDC	2001・8
『お葬式』	伊丹十三	1984	ATG	ジュネオン・エンタテインメント	2005・8
『逆噴射家族』	石井聰互	1984	ATG	ジュネオン・エンタテインメント	2001・5
『さびしんぼう』	大林宣彦	1985	東宝	東宝ビデオ	2001・7
『ウホッホ探検隊』	根岸吉太郎	1986	東宝	パイオニア LDC	2002・3
『別れぬ理由』	降旗康男	1987	東映	東映ビデオ	2009・6
『北京的西瓜』	大林宣彦	1989	松竹	パイオニア LDC	2001・9
『ふたり』	大林宣彦	1991	松竹	パイオニア LDC	2002・2
『未来の想い出』	森田芳光	1992	東宝	バンダイビジュアル	2002・6
『釣りバカ日誌5』	栗山富夫	1992	松竹	松竹ホームビデオ	2010・5
『ひき逃げファミリー』	水谷俊之	1992	アルゴプロジェクト	ジュネオン・エンタテインメント	2001・2
『静かな生活』	伊丹十三	1995	東宝	ジュネオン・エンタテインメント	2008・12
『Shall We ダンス?』	周防正行	1996	東宝	角川ヘラルド映画	2006・10
『失楽園』	森田芳光	1997	東映	角川映画	2006・10
『菊次郎の夏』	北野武	1999	日本ヘラルド・オフィス K	バンダイビジュアル	2007・10
『みんなのいえ』	三谷幸喜	2001	東宝	フジテレビ	2005・12

『阿弥陀堂だより』	小泉堯史	2002	東宝	アスマック	2008・10
『わたしのグランパ』	東陽一	2003	東映	東映ビデオ	2003・9
『空中庭園』	豊田利晃	2005	アスマック・リトルモア	ホニー・キャンオン	2006・5
『トウキョウソナタ』	黒沢清	2008	ピックス	メディアファクトリー	2009・4
『おくりびと』	滝田洋二郎	2008	松竹	セック・小学館	2009・3
『歩いても 歩いても』	是枝裕和	2008	シネカノン	バンダ化ジューエル	2008・1
『今度は愛妻家』	行定勲	2009	東映	アミューズ・エンタテイン	2010・7
『レイルウェイズ』	錦織良成	2010	松竹	松竹ホームビデオ	2010・10

(こばやし みえこ)